

## アトモスフィア

# 若い研究者の明日のために

村 松 喬\*

若い研究者を取り巻く状況は楽観できない。ポストドクトラルフェローを繰り返さざるをえない、ポストポストドクの人たちの数は依然として多い。若手のための正式なポジションは減っている。若い人たちが科学は惹きつけていけるのだろうか、と心配になる。ゆとり教育の弊害と理科離れという背景もある。

数年前、日本生化学会は、ポストポストドク問題の解決など若手の待遇改善を、研究体制問題での重点の一つにとりあげた。山村博平委員長と私を中心に理事会で討議し、研究体制に関する提言をまとめ、関係方面に広く陳情した。その努力は無駄だったのだろうか。

しかし、いくつかの明るいニュースもある。若手のための高額な研究費が設定された。重要なポジションに30代の研究者が抜擢された話を良く聞く。助教、准教授という研究者としての独自性を連想させる呼び名が導入された。多くのことは、光と闇の格闘で進むのであり、日本生化学会の努力もプラスの側へ進む一つの力になったと信じたい。本会はゆとり教育の弊害についても、理科教育の視点から積極的に取り上げてきた。今後も、本会が若い研究者の待遇改善について、タイムリーな活動をしていくことを期待したい。

3年前の、ある調査では男の子のなりたい職業として、学者が野球選手、サッカー選手に続いて、3位に入っている。いろいろなことがありつつも希望は大いにあるのである。若い研究者のためにプラスになると考えることを、以下に思いつくままに挙げてみたい。

まず、ポストドクトラルフェローの待遇は出来るだけ良くする。うらやましいと思われるくらいが丁度良い。そのため、絶対数が減ることを覚悟する。

そして、ポストドクトラルフェローや大学院生がその先の道を開拓できているかどうかを、研究機関やプロジェクトの評価のさい、一つの指標とする。

最も重要なことは、有望な若手のための独立ポジションの数を増やすことである。ポストドクトラルフェローというアメリカ型の制度が動いていて、その先が閉塞していると救われない。いくつかの先進的事例はあるので、ぜひ数を増やすべきである。この際、誰を独立させるか、そして、ある期間の後、そのプロジェクトを続けるかの判断が重要になる。大学間、研究所間の競争が激化しているのは、この点で好ましいことであろう。

若い研究者はもっと盛大に祝われてよい。最近、ヘルシンキ大学の学位審査にオポーネントとして参加した。審査後の祝賀会の豪華さには驚いた。結婚式よりも華やかだそうである。新聞も取材に来るそうだ。制度が違うので、学位授与では無理であろうが、研究費、学会の奨励賞など祝う材料は多く、本会も、もう少し寄与できそうである。

研究者として成功するためには、素質、努力と共に運が必要である。運がなかったと判断したとき、転進を受け入れる社会でありたい。私は今、スポーツ青年が多い学科に属している。ここには、スポーツのプロを目指していたが、怪我をはじめとする不運のため方向を変え、スポーツとつながりは持ちつつ、別の道を探す若者も多い。彼らのそれまでの努力は、賞賛に値する。スポーツを通じた自己規律は日本の明日を支える一つの因子かもしれない。若い研究者のストイックな努力も、同様にいやそれ以上に評価されるべきである。問題なのは、若い研究者の場合、転進の判断の時期が30前後あるいはもっと後で来ることである。若い研究者がいかに努力しているかを、広く社会に知ってもらうことも、人材としての長所を宣伝するために必要であろう。

\*愛知学院大学心身科学部健康科学科教授、名古屋大学名誉教授、本会名誉会員